

「私の相撲人生」

舞の海秀平氏



本名：長尾 秀平  
(ながお しゅうへい)  
略歴：  
平成2年5月 出羽の海部屋入門・初土俵  
平成3年3月 新十両  
平成3年9月 新入幕  
平成11年11月 引退  
最高位：小結・技能賞5回受賞  
生涯戦歴：385勝418敗27休  
幕内戦歴：241勝287敗12休  
得意技：左四つ・下手投げ  
現在：NHK大相撲解説者  
帝京大学講師（スポーツ社会学）  
青い森の特派員（青森県）

舞の海です。今日はお招きいただきまして有り難うございます。地元青森の講演ということで、喜んでやって参りました。九年半現役でやって来て体験したこと、感じたことをそのままお話ししたいと思います。

まず、昨年11月の九州場所で引退したのですが、ちょうど十両でした。ご存じでしょうが、十両までは関取で、その下に幕下、三段目、序ノ口とあるのですけれども、十両は十三枚目まであります。私は十枚目だったものですから、ちょっとヤバかった。どうしても勝ち越しか、最悪でも7勝8敗で終えなければ引退しなければいけないと。幕下で相撲を取るつもりは全くなかったものですから、なんとか2000年につなげたいなと思っていました。引退する気持ちもなかったんです。

場所が始まって、最初は良かったんです。調子いいなあと思ったら、中日くらいから負けがこんできて、13日目に水戸泉と当たって足を怪我してしまいました。13日目を終えて6勝7敗。これはまずいなあ、何とかあと一つでも勝たなければいけないと思ったんですけれども、14日目はどうしても足が動かないもので休場したんです。その時点で6勝8敗になってしまった。そして千秋楽、勝たなければいけない大事な一番でした。対戦する相手も幕下の若香翔という力士で、3勝3敗。幕下は15日間のうち、7番相撲取ればいいわけですから、相手も勝てば十両に上られる。私は勝てば十両、負ければ幕下という入れ替え戦で、大事な一番だったんです。

これはもう絶対勝たなければいけないと思って臨んだけれども、あっさり負けてしまい、もうこれは力がないな、と感じました。力のない者は去っていかなければいけない世界ですから、相撲取り終えて花道を引き返し、風呂に入りながら考えました。6勝9敗でも残る可能性も少しはあるかなと。しかし来場所の番付を計算してみると、幕下から上がりそうな奴はと考えるといっぱいいる。また落ちる奴はあれとあれとそしてあっ、次はオレか、こりゃ幕下に落ちるなあ、もうパッとわかるわけです。

風呂に入ってる時に、付き人が、マスコミがいっぱい集まっていると言ってきました。負け

越したのにいきなり来るわけです。それを聞いたときに、これは今後の決断を迫られてるんだなあ、辞めなければいけないと考えたんです。本当は親方に残り、自分でも部屋を興していい力士を育てたいという夢もあったんです。その親方には定員が決まっています、定年しそうな親方がいない、いっぱいなんです。また親方になるためには、ある程度お金が必要なんです。そのお金も全くない。あまり貯金するタイプじゃないですから。相撲は月給制ですからサラリーマンと一緒にです。毎月銀行に給料が振り込まれます。十両で大体7~80万、幕内で100万位です。多いように感じられるでしょうけれども、関取になると付き人が付きます。自分の身の周りの手伝いしてくれる人は1人でいいんですが、2人も3人も付きます。というのは、関取の世話をしながら、ひとつひとつ仕事を覚えていくんですね。まあ相撲界の修行なんです。で、つけられるとただ使っているわけにはいけません。たまには飯に誘ったり、マンションの家賃も払わなければいけないとなると結構厳しいんです。そういうことで親方になれませんでした。

それで、相撲協会の中から支えていくというのも大事ですけども、相撲界に何か恩返ししていくという形も一つのやり方なんじゃないかなと思いついて、今は第二の人生をやっているんです。考えてみれば、入門するときの目標だった、1場所でいいから十両に上がりたい、関取になりたいという夢以上のものを達成出来て、親方になるために相撲界に入ってきたわけじゃない。原点に帰ると残れなくて当然かなとも思います。

そして今ご紹介にあつたように、帝京大学の非常勤講師とNHKの相撲解説の二つを中心にやっています。一番大変なのは、現役中はその日その日の対戦相手のことだけ考えていけば良かった。しかし解説になると、幕内力士40人一人一人の長所短所と得意技や癖、性格などを全部把握しなければいけないんです。なるべくその人のいいところを見つけて誉めてやろうと思っています。解説といっても、相撲の場合は正面と向正面の解説があって、私は向正面の解

説なんです。正面は北の湖さんなどがアナウンサーと2人で座って解説する。皆さんはテレビの画面で、正面の解説者と同じ側から見ています。私は反対側から見ていますから、立ち



会いどう当たっているのか、行事の影で見えませんが、それと相撲というのは一瞬の勝負ですから、相撲が取り終わると、もう全部忘れて頭が真っ白になってしまう。そういう時に限って、「舞の海さん今の相撲はどうでしたか」と言われても、全くわからない。しかし最近はずいぶん慣れてきて、相撲が取り終わった後でも少し頭の中に残像が残るようになってきました。

私は鯉ヶ沢出身で、小学校の頃相撲大会に出て、たまたま勝ったのが相撲を始めるきっかけだったんです。それから中学、高校と相撲を続けていったのですが、中学に入ると周りの友達がどんどん大きくなって行くんです、成長期ですから。ところが私には成長期が来ない。結局高校1年で成長が止まってしまったんです。168cmで。今まで勝っていた相手に勝てなくなる。だんだん相撲が面白くなって、辞めようかなと何度も思ったんですけれども、相撲部の先生が辞めさせてくれなかったんです。特に理由は言わないんですが、成績も全く良くなかったんで、相撲だけですなあえて取り柄があるとすれば、そういうところも考えてくれたんだろうなと思います。本当に中学の先生には感謝しています。

そして高校から日大に進むわけなんです、日大に入っても、体重が67~8キロしかないわけですから。大学相撲は150キロとか200キロ近い人が一杯いる、プロと変わらないんですね。当時4年生に智の花、3年生に久嶋海がいましたが、こういう人達と全く一緒に稽古できないんです、大人と子供ぐらいの差がありますから。これはもう食わなきゃいけないということで、大学1、2年は本当に食べました。朝から丼3杯、夜は丼5杯、昼間も定食からラーメン、丼など、寝る前にまた食べて90キロぐらいになったんです。

90キロぐらいになると、今まで吹っ飛ばされてたのが、押されても土俵際で残せるようになって来るんです。もうちょっと体重が増える

と、残してまわしをつかめるようになって来る。まわしをつかむと、投げが決まるようになり、少しずつ勝てるようになって、少しずつ試合に出て勝てるようになって来るんです。

そうすると、どんどん自分が強くなってるのが分かるんです、それまではやらされている感じだったんですけど、やっと自分で強くなるという気持ちが湧いてきて、試合に出れば勝てるという状況になり、プロなら番付けはどの辺かなとか、好奇心が湧いてきたんです。丁度その時、日大の監督から、山形の方で学校の先生をしないかという話があり、就職先は内定していたんです。しかし、就職は決まってもあんまり嬉しくないんです。やっぱり相撲をまだまだ続けたいんです。アマチュアでも相撲が出来るんですけど、自分の生活を全部相撲漬けにするためにはプロの世界しかないですね。しかしこんな小さい身体でプロに入ると言っても、周りが反対するんじゃないか、笑われるんじゃないかといろいろ考えました。丁度その時に、相撲部の後輩が亡くなったんです。いろいろと考え、人生一度しかない。勝負してみようと思いついて、相撲界に入ることにしたんです。

入るには新弟子検査があります。身長173cm、体重が75キロ以上なければいけない。体重は90キロ以上ありましたから大丈夫。問題は高校1年で止まったままの身長で5cm足りない。大学で、ある程度実績を残したということで大丈夫だろうと安心していました。3月の大阪場所前の新弟子検査に行き、やっぱり5cm足りないのはあんまりだろうと思って、鬢付け油、お相撲さんが鬘を結うときに塗る油。あれは石鹸みたいに堅いもんなので、それを一個ごと頭のてっぺんに隠して、髪の毛で覆って行ったんです。大丈夫だと思ったんですけど、3月というはまだ寒いんですけど、何故かその日だけ暑くて、溶けちゃったんです。もうグチャグチャです。

それに身長検査は計る親方にもよります。融通がきく人もいるんですが、この時は柏戸親方で、悪いものは悪いというはっきりした性格なんです。何回計っても170cmないんです。それはそうです、油は溶けてるし、降ろすたびにグチャグチャ音がして。それでバレー、ひどく叱られて落とされました。新弟子検査というのは場所の直前にありますから、年6回あるんです。3月は落ちましたから今度は5月なんです。2ヶ月しかない、これは何とかしなければいけないということで、いつも行ってる病院の先生の所に相談に行ったら、ある美容外科を紹介していただき、そこに行ったら、「シリコン入れてみないか、簡単に終わる」ということで、入れることにしたんです。

前日友達とガンガンお酒を飲んで二日酔いで

行きました。全身麻酔で寝てる間にとっついたら部分麻酔。頭のとっつぺんに麻酔を打ち、後頭部を10cm ぐらい切るんですが痛いです。痛いというとおかしいなって麻酔を打つんです。よく話し合ってみると、酒を飲みすぎると麻酔が効かない日があると。しかしもう半分切っちゃってるから途中で止められない。切ったところからペンチみたいなものを入れ、頭皮をはがして、中に何も入っていないビニールの袋を入れるんです。

しかしビニールの中に何も入っていないからこれだけでは173cm にならない。ふたをして、袋に少しずつ食塩水のようなものを入れてだんだん膨らましていくのですが、頭の皮ってというのはすぐには伸びないらしいんですね。少しずつ少しずつ伸ばしていかないとダメなんです。頭の皮だけ引っ張られる感じで、顔が全部上に引っ張られる。ですから辛いのは夜になり眠くなくても目が閉じない。本当に夜眠くなるのが怖かったです。結局5月場所の検査当日まで全部は入らなかった。頭の皮がもうこれ以上伸びない。しかしこの一ヶ月間苦しんできてあきらめきれないと、当日の朝いつもの倍位麻酔を打って、今日一日我慢すればと、2回目の検査は北の海親方でした。優しい人で、頭にシリコン入れたというのをどこからか聞いてたんでしょね、「痛いかな、もう少しの辛抱だから」と。それで173cm。やっと合格することが出来たんです。

その後10年近く現役をやることになりましたが、一番思い出に残るのは、やっぱり最初に曙関に挑戦したことです。ずっと相撲を続けてきて、まさか身長205cm、体重230キロの外人と取るとは思っていませんでした。地方巡業になると、普段は部屋同士でしか稽古しないんですが、幕内や十両の関取全員で稽古をします。そこで曙が、小さい奴が上がってきたということで、面白がって自分を指名してくれるんです。そうするとポンと一突きでもう3mぐらい吹っ飛んじゃう。もういっちょ来い、またポン、またポン。曙関としては面白いわけです。

巡業中で、私も曙関と当たるところまでは番付け上がらないだろうと思ったんですけども、何十番も稽古している内に、立ち会いから両手突きばかりだということに目を付けました。その手をどうにかして、相手の懐に飛び込んで左でまわしを取らないと相撲にならない。左まわしをとって曙の腰に食いつくにはどうしたらいいかなと考えたら、当たる寸前にひゅっとしゃがむことを考えたんです。これで左まわしがとれるんじゃないかなと思ってやってみようと思ったんです。ところが待てよ、もしかしたらいつか当たるときが来るかもしれない、とにかく今は曙にこれで勝てるということを感じ



ませておこうと、今までよりもっと派手に飛んで、わざと土俵下や観客の所まで吹っ飛んだりしました。

そうしてるうちに、私も十両から幕内に上がって2場所目、とうとう対戦する日が来たんです。それで、今までやられてた仕返しをするいいチャンスだと、絶対やってやろうと思いました。呼ばれて土俵に上がり、仕切ってから立ち上がると、やっぱり大きいですね。目線が臍なんです。曙は上から睨みます。私も睨みたいんですけども、見上げなきゃならない。これがまた癪にさわるわけです。大きく、ちょっと怖いなって思ったんですが、今までの恨みがありますから何とかしなければいけない。制限時間一杯になってぶつかり合ったところ、案の定曙関は、これで勝てるものだと思ってました。両手突きで来ました。それで私も、まともに行くふりをして、当たる瞬間にひゅっとしゃがんだんです。もう一つ期待したのは、曙があわてることでした。大体大きい人というのは、あわてること無謀なことをして来る、雑になって来ます。

どういことをするのかということ、まわしを上から取りに来る。まわしというのは絶対上から取りに行っちゃいけない。落ち着いて腰を引いて構えていれば、何も負けることはないんですけども、今度は吊りに来たわけです。重いものは引きつけないと吊り上げられない。引き付けて吊ることによって、私の足と曙の足が密着する、密着することによって足が届くわけです。これはしめたと思って、丁度吊りにきた時、タイミングを見計らって曙の足に内掛けをかけたんです。一つだけ計算違いだったのは曙の足が長すぎた。私の足が短くて、電信柱にただ足を絡めてるのと同じ感覚になるわけです、曙にしてみれば、それがどうしたっていう感じなんです。そこでもう一回吊りに来た時に、足をかけて、もう一方の足を手で取りに行ったんです。これは三所攻めという技ですけども、それで勝てたんです。吊ろうとすると、身体を反らして後ろに重心を移して来ますから勝手に倒れるわけです。私は力をたいして使っていない。テレビで見ている人には一瞬の勝負ですが、やっている方は、倒れていく時に勝った負けたという

ことが分かる。気持ち良かったですね。相撲やってきて良かったな、辞めなくて良かったな思いました。お金いくら積まれてもああいう経験はできません、お金に変えられない貴重な経験をしたなと思います。

話は変わりますが、相撲解説をしているものですから、ちょっと生意気なんですけれども今後の相撲界の行方です。よく皆さんから相撲が面白くなってきたといわれます。なぜ

かということ、大型化してきていますけれども、今のお相撲さんはちゃんこ鍋を食べない。ハンバーガーとコーラ飲んでますから、ちゃんこは余っちゃう。ですから健康な太り方じゃないですね。ぶくぶく肥満体型になって来てるんです。そういう人達がぶつかり合うもんですから、結局下半身で自分の状態を支えきれない。ですから腕を下にもつれていくと必ず怪我が付いて来てるんです。当たっても、立ち会いで当たり勝った方が押し勝っちゃう。叩けば、バタッと前に行っちゃうので、攻めと守りの攻防がないんですね。熱戦というのが少なくなってきたなと思います。

しかしそういう相撲界でも、新しく上がってきた楽しみな力士が結構いる、それが偶然にも青森県の出身力士なんです。例えば若の里とか高見盛、安美錦などで、みんな楽しみな存在です。中でも若の里は、大関を狙える力を十分に持っていると思うんです。ただ弱点は手が短い。足が短いのはいいんですが手が短い。短さを有利に生かして、まわしの取り方を考えていかなければならないんです。私も一度対戦してますけど、本当に鍛え抜いた本物の実力なんです。ピッチャーでいえば本格派です。これからどんどん順調に伸びていくと、魁皇と似たようなタイプに育っていくと思います。

日本人で一番強いのは魁皇じゃないかと思うんです。魁皇というのは上手を取って投げます。この感覚は人間に投げられる感覚じゃないですね、クレーン車に引きずり回されるような感じです。それと安芸乃島です。安芸乃島が幕下時代、私が学生の時に一緒に稽古したことがあるんです。左でまわしを取って食いつくと、あまり負けたことがなかったんですが、安芸乃島は上から片手でまわしを取って持ち上げ、下にたたきつけるんです。それが幕下時代だったんですから、幕下でこれだけ強いのであれば、十両とか幕内はどれだけ強いんだろうなと思った事があります。

相撲も確かに面白くなってきていますが、身体がみんな太って太って、太り散らかしてる



感じなんです。ですから身体をもっと絞ること、大きい人だけでなく、小さい人や、安美錦のような細い新人も入れて、そこからだんだん筋肉をつけていくと、もっと躍動感溢れる相撲が見られるんじゃないかと思います。

最後に中学校の先生です。辞めさせてくれなかった先生がいたし、そして後輩の死があってプロに入れる決意が持てた。そして柏戸親方が落としてくれた

んです。畜生、この野郎と思ったんですけども、今振り返ってみると、落としてくれたから、さらに自分が相撲界でがんばれたというところがあると思います。

また相撲で怪我をした時も、怪我をする時まで分からないことがいっぱいありました。例えば応援している人の気持ちとか、分かっているようで実は分かってないところがいっぱいあったんです。怪我をしたことによって、いろいろな人のありがたみとか感謝が分かるようになって来たんです。そういうものを乗り越えて自分で頑張ってみると、過去にあったいろんな出来事が全て良かったんだと思えるように、感謝の気持ちになれるというのが、相撲界にいて体験したことです。

最後に、今日は若い人も来ていますけれども、これからいろんなものを目指す時、絶対自分で自分の限界を作らないことですね。自分はまだまだ大丈夫なんだ、絶対自分はまだまだ伸びるんだという気持ちでやって欲しいということと、辞めて分かったんですが、目標を達成したという喜びもうれしいんですけども、もっと大事なことは目標に向かって頑張れたことなんです。頑張れた過程がすごくうれしい、自分みたいなものでも、頑張れば出来るんだと、新しいことを発見できたことがうれしかったし、それが一番大事なんじゃないかと、辞めてみて改めて思いました。

少し長くなってしまいましたけれど、今日は最後まで聞いていただきまして有り難うございました。

